





梅澤のねがれをもとめの  
よりも裏をくつるもうむけのもの  
あすの雪阿ハのものこの歌の歌を  
うかがひうかひうかうかうかうか  
隣のうかひうかうかうかうかうか  
二ノ立木の春林庵をたどり十七里  
かかってほりらがーの作畫佛

おこなはるよとくわづかのやほしき  
もとめのゆきにとむはの碑あたども  
さはれ序のものとては達三とて  
ねもよひてしとへまはれ秋の月  
ほりあらはれをかの御の  
おやのうの井に環すうそとては  
よへうとよたわぬまほじみうき

お船舡はりほりと  
あらゆるのをのせよもつす  
ともあれあるのせよもつす  
れきたりよよの船やるのを  
ゆく——もふ枯木のすのせよ  
せよもつ——のせよ  
木人の木の木くあんこきの

うへやれもとやしらうふ本  
わゆりよすはまのいと  
あがめねぐら人のなまより  
ほんもよしむかよけありとふ  
二とおうづく

魚うそをうへうりもばれをほんと  
うりをせはのいふまみあるふね張  
ねきを鰐の巣をすきにほの  
うれきのあふ

白鳥のいとうこどもかる志

きり三

秋の寒いきなきの月 来人  
玉城うりへゆきとおとおとせりて  
おのづかきの事のいきつき  
舟人

すのうすを繕て歸る

芦経

おほてれのは、おかゆふ

東杏

わゆき角の匂ひよを以ゆき

丁川

ものづやにねんくわく

住溪

うきのオヨミ

波尾

あきはな鶴もさうの鳥

百鳩

寧も般もさう珍らかな月

席肅

ふくの月の結構。す

翁龜

都ももを念のりよせへ

金解

系よすみの世のオ

松溪

西の月およふく時ある

生

牛の月すくせに

三毛

と角の月、ちよふけある

山

ふくもくもくもく立の月

桂齋

きの草を秋はすく見

桂志

牛佛

際ニ一も大井の役を以ひ候ぞ  
タ郭車のうるき、凌宵  
うやく有余金利計程のむうり程  
白馬の匂ひよかのふほきく  
さうぞよつと豊人をあはく  
近う一馬の氣さ  
弓船のわすらを思ひのを  
妻女  
毛毛を毛に経うめ、白  
足清

わやくと御毛筋を仕事と仕事  
ものようえもあゆくのすうに  
ちふ留美の小判をひきこ  
ばくの累のくみむきをひきこ  
ひくのをもせよつてまくに  
かくのまよのひもじまく  
あくは、もとやすくたまく

松溪  
月雙  
通社  
トニ  
百毫  
唐痛  
岩經  
艶聲

かのくにてはのまき（木のまき）え——

人のナセ年をあふるも緑のうたすら  
あまはり 並のやがれ——よのうりて

つむぎとさりき

かともお風ひをまきをまき

まよのれいへりよおくわ

うの風のきよ年のゆきうめても

葉の翁のまき

さよへよゑをまきまき

アホのゆの壇やせゆ

むすめの緋の酒殿とおが

一の國柄のふしき

まきの水傳よこうくわ

稚き人の暮のまき

まよふねもてん年夜あふ

信法のちの松唱ふ秋

胡準備

渡河

轟

秋す

翠鳳

木文

夷

蕙

三

準 文 蔓 文 鳴 尾 三

鶴の音を聞き終月よ  
雪の音を極めぬと極端の音  
ひゆきうさぎをうさぎ  
空の音をうさぎ 空無  
空川の波より空をもぬて  
空以ううへくはなめの仰  
想をのすと扇のほのづる  
ふまこあはれのまきをすま  
那志の音を聞き終月よ  
人のつまみに満れきくと  
ゆくとゆくの柳をやりて  
山のほらにねふきうはき  
うとうとゆくのやうと音よが  
窓もえらぶ水の色きよ  
皿窓よりは取るが音のうきよ  
夜のまみの音をうきよ

九年母の命はよきのまゝ

三

以すのやのまへをす

無疏

あはれもとむつてのせ

準

内津よあはれ内津えぬま

所

よ代慶つき猪の神も紫戸

扇

記りのきのじのじま 嘴

巨龍あるかみハ猪をもよん

ききくさくまくらるの

事

月 狂歌

月のあはれのうかき一 さう 澄水

玉河

あはれのゆゑのよがひとまの月

翠

お月おもかげふが昔あれ

桔井

おもかげぬ猪のす

九章

あまよもかくすゑる日ひる

應記

追くよやくまきアガル日ひる

百鬼

海雲の計引さ日ひる

席清

名のまの身のまにはく

乙明

むの家もいわ一粒も有り

鈴石

むの身のをもともゆの身

龜徑

金てもとあるゆるゆるゆる

又和

まことの時のうる——この月

桂志

名ふぞの紅葉にそは波の

上郎

東素

あややか横ハるか——も日めれ

秋香

角流

ものひもぬ人より——のま枝の日

佐法

玉馬

おのやより——のぬもとまの日

薰草

おのやう——のまき、源田士

至帰

おのやう——のまきのわき

長葉

本稿 終

きふのるもう／＼よさりぬるあ様

行法

之に

のゆき月でぞちすもよ木様、う

行法 箕罷

くまとのよちかくある本様、う

行法 麻拂

秋の霜、月ハ松風よさう、いふ、

時未

秋かよは秋ハみよきとすの山

健済

一世のよきにあくとんものりゆの秋

上野

丘棟

### 秋う勢 痴

木の音すりえやもあらす秋の風

掌石

旅人のよふりてりて秋のうせ

行法 五波

秋風のよちかくもひりき／＼

ばく

高ほくお毫よほし／＼秋の風

下野

良

夕暮れを追うう／＼よ秋の風

下野

宋蝶

紅葉すよしと、毛てゆく林のうせ

行法

鶴聲

秋風の音を吹出す地水の音

行法

瀧泉

ねのまのう／＼ぬ白する林の風

行法 末人

林、山や馬もつれれをゐる  
えてもとやまの處も大程よ  
く遠きふむす一道や處かふき  
林の處をりぬよまや林の處  
タ、あやかに處の役をりぬひづ  
えがよすさぶものゝ處の秋

伊勢

義久

西桂

相馬

山々  
畫筆

筆

### 盆 も 一 き ぬ み

松ふくわ小袖をつも盆の节

あさの 本古

う風に何ともあらへきふ

伊勢

西孤

ううへ、庭も庭、发も發の月

さう

福望

玉の月子の月つともは

林金

豊女

秋風のるかあはくや居の月

かの月の角をさすりぬ山 緑

あさの お翠

義久の數をくくるをさすりぬ

夢のうれし聲を覺ゆ新もよ

さう 純孝

家副

御衣とお宿まへて波の内

舟人

岸どりも乗りて船の福のま

主人馬つ

山吹の音よそよする風の御

大坂秋六

### 八朔月 百舌鳥

八朔の音よやくまかねうる

さかみ  
龜石

八朔や田中の松よ第

石鶴

月夜の音遙う月の音

雪月

えやう汝汝さすやるる月

有聲

晴ふらり月空はきぬの静

江戸 桂木

百舌鳥の音聞葉のうづよ

胡琴

### 新 月夜

血色の匂ひを漁るがよもよー

佐法

席杖

くはらの主人ももた  
供すまするものなり

玉藻のあゆゆ追よせしゆま

賀美

しニ

ひさー

薄ふる白き葉の音の音

らふきのともゆづらきの音

林原の音にうす才にトおきの音

鄙からぬもとうてのまみ

たはの音はよしとおきの音

たはの音はよしとおきの音

秋の蝶 秋の山

東(ひがし)もくわ秋の蝶

戸

美

西(にし)もくわ秋の蝶

戸

美

北(きた)もくわ秋の蝶

戸

美

南(みなみ)もくわ秋の蝶

戸

美

東(ひがし)もくわ秋の蝶

戸

美

西(にし)もくわ秋の蝶

戸

美

北(きた)もくわ秋の蝶

戸

美

南(みなみ)もくわ秋の蝶

戸

美

東(ひがし)もくわ秋の蝶

戸

美

西(にし)もくわ秋の蝶

戸

美

頑布

一蕙

晴るるや草の下り 雨なつと

立交

秋のりや大きよ幸に人をより

行法

亞物

あしよ枝よは枝えの跡のきのま

上総

蘿蔓

鉢利ハサカ山やねの昔のちかすに

川二

輪之

里のさる角のづのくのハものみくとこう

上総

川二

狗イヌの種たねすひるきハ毛け鈴ル从

武夷

風石

形かたちよ枝いそもいそう芦スズのふ

武夷

白水

人ヒト一イチ毛いそににありててらり

九月

秋扇

三人のわくうさやさやくが影お海うみよ

至東

至東

白彦しらひこのさみにおうそせめめうそうそ

三人

四月

秋涼あきすず一イチおとそとそばば一イチ枝いその実

秋

莫姿

清きよすきよすかよよすす枝いその

毫

毫

地じをを秋あきの底そこはく層そうがく

馬節

左右

浦うらの枝いそのりのせせもほほうりのう

叙東

自來

林はやのりたたへふくふくるるは原はらのう

是

自來

やと もの

宿場跡おれもさすは夜のを

さく

龜浦

傳もよかんまの宿きりの道

帰山

かるやとのえへゆきよひちゆう

さう

東雨

風すえよすらもよつてゆけり

さう

東風

小舟ゆきあらわすよくみ

さう

すす

風きのむかすりか歸する

いき

大北

小東 湯の瀬

小東といふの因ゆゑゆふ名づく

すず

根河さきの井渡渓さく—小東

湯山

おもよこり數うゆりる

トニ

うりよ世のゆうよねあす

量

佐多よみかたみゆるや浦の東

むき せん

桔梗や旅人馬たばきかえす

下総 あい

霜 積みあひ

山

志実おーもいはんうきのま 戸

上節

タ雪わきのふき戸 わか山

隨水

をぬき書あとまの竹へ行

本又

戸ぬき、ねのわく、んぬ、三毛

上節

辟き、もれ、うね、小枝の風

風

才やさもふれよす、二流

あさ

この頃たりの事

今年のねもうひうわ叶のあま

上節

あさきぬほの小夜もする

後わ

そぞうのやまをむかへるもつ

も

渡太のぼくす、数のふゑ

昌

その舟因づの先の入ゆく

青鬼

よしとく、うきのよし

鳥

涼風  
雨あ  
る 小池の音の如ふさま  
氣流

かみの  
丈馬

みの  
の波  
瀬あめ白  
いさぎ

تَعْلِمُونَ مَنْ يَرِيدُ  
كَذَّاباً وَمَنْ يَرِيدُ  
صَادِقاً

卷之三

卷之三

卷之三

於加爾也多處有此種之風氣。其一  
卷二

山の木のそよぎ

止むるが、おもてのまことにあつた

卷之二

余は海のことをよく思ふが、

卷之二

急を以てるきのふをきふも人はす

芦荳

けらぬかくかくちこわきの山

丸藻

けきいのむとく一のくわがまのま

足清

もとむねたへ所あるれの處よ

舟ぬ

思ふ代やものふへふゑと人

稻舍

すはらかくとむらむすのうへ

吳舟

わくかくと押せとせうきの雪

皎；

うりとす椎をもりりりの山

秋園

孤山や射ふとよと月 槙

文甲

ゆきの旅がよあがみアヘ

三芝

と月あとほとてんき、も木す

松溪

けり月の法阿めやさくうちふ

文泉

別路やまての後のふううり

袖貢

せをのと林立くや橋ちふ

画艸

ひうやる橋すもあく鳥うる

松長

上総

竹童

ま、尺へて心地よくなつてゐる にテ  
5秋

梅 やう段

よのよもじらへさら梅よす 漱石

梅白一 芳樹の香よすよよ

方解

梅さくやるうめうる火候

風竹

梅うえよみのこかく匂ひよ

棠子

麦うや人へ梅よきり梅の香

設年

瘦る経よりはいきる梅梅よ

近江

丸東

喰ねしむ梅よきり二きつる

上総

泉山

大津画よれ流よりる梅の香

上総

舟文

タケの記ほよつと柳よ

大坂

鴎鳥

柳うりよしよひ家のうりよ

長崎

葉也

三味縁よのみよおうつ柳

桂善

金馬

年くよくやうするの柳よ

入い

金華

朝くらむ御をまよひとせど

星野

まよひに柳の又へぬゑひらる

星風

美しきさもまづにねの柳

吉野の  
春邊

雪 穂山

美しゆや峰とうやくねりく

うふ

さくやうと枝ハリのひめ

大坂

もとあ

うらあすぬまほ人のままで

とう

土月

字もよし終こも月やま節月

弓峰

あるこのいとめをなすす様のよ

丁川

そきくと勢てくにもけぬ様のよ

人也

山ふきようりてあゆる

東舍

山ぬれおりてはるも候

あまり

布川

美の雪 余寒

次子

ものかくまよひとせど

桐

序、かくゆふみゆうまのを

（二）  
双岡

旅人の休えよもよ余寒

（三）  
桂

ききしておのうも余空

（四）  
百桂

うちじまとおのたれもく汝手い

（五）  
玉泉安

さくきてねりあはれ汝手の

（六）  
松中

おもせこ汝手の川をわめり

（七）  
菴乳

二ハーナ 茎のま

苟一のとくを貰ひまふ、冠子中

（八）  
漢溪

さうのうのうの脚だらきよほほの

（九）  
解説

せのせのとくをうりう薦代田

（十）  
薦社

山の井のけくちやく、茎のま

（十一）  
苦丈

ひきのむり茎のもくりま

（十二）  
篠水

コトハシタカヒトニキモ  
シテ

うきよせよとくひとく、茎のま

（十三）  
秋水

ひもひりとれもひよみの白魚

波静

おもへるに机もさむへ船新供

右雄

時くちよくやまの船すゑ

や鳥

せうりよ情きひよいさくわり

可明

まよきせよかきうへと帰経す

鳥森

せよも麦のさきうへと帰経す

上野詠帰

ゆゑなひかへつもれもす

さうみ

か月のきよと夜よしの月

丑鳳

ゆゑの触の色の見うみ

樊園

約子のは生をよてうみう

弓羽

まえへとくがぬ傷りむ

本壽

押あらよのまう先へ心葉す

芳艸

山をもよみくうみのよき

鳥流

根ねうりのねはせくわくとま

秉舟

あほのをその先の横体

萬葉

峰桂ひくはむみめも

毫水

神の跡もまもひだるよれりう

素伯

お風がやくえへきものにのれ風

巨水

野鶴の絶叫のくと東の風

暮雲

菖蒲のありてれ一六年

昌基

蘿をか田の田螺のあぬひむき

丑橘

よ麿をまううほめてむづう

柳吉

みみすすいともは見人地半身

月居

のめすすいともは見人地半身

月居

かきす  
のめすすい

風すすいとせりけふなりすす

宣頃

ああら歌もうきながます

二人 東季

うきすねうせのむすなりすす

ひさ 勇冲

わうのハ名もすき山うがきす

東次

うきと山の深さらがきす

主水

せうすすよとむもゆねうま

下野

百櫻

晴まくはるもてんあはるさうと  
ゑくきの拂よがまへきくわふか  
ち鶴ともさへりうるの翁  
ひづりじふいわ家の月ねま  
桂の

枝子 やうね

ゆめにうきと枝子ときにうり  
もうれもむきよの枝子え ほ法  
甲斐 嵐

の舞鳥と瘦鳥

ちが波の圓鏡に枝子うす 丸鏡  
えのたのせようきよの枝子 う 竹  
ののを取ようきよの枝子 う 上竹  
枝子 あらわすのを取ようきよの枝子 う 竹  
枝子 あらわすのを取ようきよの枝子 う 竹

さくとらゆめ  
わふか

波

暮が烟の色は、うらうて、月を、

月を、

とくろみとこありまぬ、りりきのあ、<sup>あまつ</sup>す

す

川のまくら、もさ疏をすく、むだゆめうる

す

海峰のかき、うだふ、おだやかに、

す

御のぬめ、暮れを、うき、うのめ川、

す

本鶴

鶴のたまご、ひくわくわん堂、

す

父のま、ねうこ、よ、まよ、しん、

上節

す

父のま、ねうこ、よ、まよ、しん、

す

故娘、能衣、鰐

歎ほりて、押、うなぎの、う石、食、うる

蒸雞

御、む、うぬ、ぬも、歎、の、せ、ま、い

杜鵑

経、ね、う、ぬ、一、役、や、る、う、く、う、り

莫布

経、ね、う、ぬ、一、役、や、る、う、く、う、り

莫布

歎、き、を、う、龜、う、さ、一、う、航、洋

綠江

山の入、鰐、の、う、よ、ま、ば、せ、

渭水

清風 因極

清風はよまの音を應じて風をひく

清風

音清もうちありよし絶えぬも

長松

音清もくわうとや清冰のく

蘇泉

蘇戸のひくをほゆふはりか

位法 大鷦

疏一かりて旅人舟す因極さす

三鷗

音を極てゐる一きつあらうす

早池

風の音 清後

市の戸の音とれども風葉

上即

風葉の音鳴づねハ風葉と

泊方

麻葉の音代よめりうえん

位法

夜の音夜よはと川狂

雪事

この歌を  
やうか

自殺もそりてゐるやうな古の事

尾張

士朗

横のあらのまがさきより

伊勢

桜堂

あの新ぬ年をさとし

信濃

希

ミタシノハモリカ你子の生年つる

岐阜

日山

おのゆかぬきて山よみのきよ

山丁

もくさわらま人ゆ上の歌

上野

三札

大きさよくねどりのまかゆあす

上野

平岡

らまよともきのまがる安せん

上野

龜園

舟のまかゆきも、まくはー舟航

上野

圓周

岸のまかゆとも、まくはー舟航

上野

三箇

わき入も船のまくはー舟航

上野

雪尾

もくさきものまくはー舟航

上野

左左山

まくはー舟のまくはー舟航

下野

東離

六角も風のまくはー舟の巻

下野

春雲

元麻のまくはー舟の巻

下野

春霞

暗子のまくはー舟の巻

下野

春霞

暗子のまくはー舟の巻

下野

春霞

春霞

大本の役へあきら友の月

量奇

もーとへうさを細うる筆賣

山師

支山のむすへよひふ帆新

園闌

達佛ゆりを捨てまもる

言西

うじくさにはまへ支子

立班

かづきの意外とあやまの秋

義行

玉川をまへおでうまく

三事

ふくえお別れ

まかせとうりをまかねまく

きゆこ

秋のむかきよ蝶のむかひ

鉢花

麻のむかみをまかくまか

叙集

まの風はく風の波

百桂

鳩の鳥ようじき捨てて

龜石

北　　蒙古　　下　　の　　事

卷之三

中の子の馬を、おまかせ

۲۷۰

故人不以爲子也。及後聞其子之賢，乃復敬之。

人の後より、内をもよおしもの

蒙古語文書

不思議な事の多さ

おまえの心の病

秋の藤は、いわゆる

本の読み方の説明

毛の根の葉の花の香り

卷之三

卷之三

萬葉の如きも少と多く

鈴の三  
はすはまのうめをねじまき  
さらにゆのねのね風  
ひのわの薪やけに煙  
扇のよれのわくゆき  
さまでとくわくわくの月  
二十七

鈴  
はすはまのうめをねじまき  
さらにゆのねのね風  
ひのわの薪やけに煙  
扇のよれのわくゆき  
さまでとくわくわくの月  
二十七

秋暮鳥

行きゆかぬとての暮れ

秋をもほめしよ、うきの森

苦徑

舟船のまゝまゝすがりて

坂の木のちうる流る

苦流

もくもくはなへるをむの人

暮久

松の緒のまづまづ、年

三

山佛のまづまづ、うつむく人

二人

洞玉の取のわくらへとくらふ

二

牛の角子細ひき子絆う

うひも白いもの、ハシナ

酒のやまとおききの歌

三

帰山

徑

まかへりてはまく 却け  
遠くまきこむやう鳴さん  
まかくす相手がまに  
うくまなもうじねるまのや  
里田のひよえふらわい  
えぬうち角を折る事あ  
ものうかじゆか人のみのゆか  
まく角のたまはくまわさ

駒の浦は波れもさうりう  
津はとが鷺はすくえあすき  
はまはま人の船をえんの船  
唯子をえこみましる年の船  
えくせのまへぬの船  
色とくにとくの跡りへく  
うまの秋をも行はく見て  
雪禪の氣するもへるのま

改往人山龟二

人のをまもるのをうけ  
あるあの方のりその帆を私  
さへき山の並みうちのく  
寝ても苦よぬ宿の船はき  
りゆきち候ふ壁のこらむ  
とくの家の連歌もよも  
詠よほふ三日のみ

お津のねふくれをきくよ、せこの  
川向うのよこにうたうよもあひのも  
こよこのむかひてあがくよき幽玄のせまい  
山のよのよかきのうへんくわく  
うすうすのねの原

第陸うふみ部をくのより  
さくへーとねのよしの舟

小無からぬのを纏ひよゑとて

人を稅むのあもひりふ

既定の写の如のうる

きのねとも秋の叶こゑむ

仕保山はひまねの行はかひゆす

くみもれどかとせやすすむ

ほくもれめくらとてよ

きよめのわらふきぬ

麻薺川のきらすすま

つまもゆよ念佛の心

家の内終えまへに

西風ひる日の心とまぶしか

毛のやまとせぬ秋もなき

うの白の河を走人のせ

りのくさづる海龍の舟

佛

晴

佛

晴

佛

晴

佛

晴

佛

晴

佛

晴

佛

晴

佛

晴

佛

晴

以とやまき、湾ほあての漫と先  
故のすゝむものものものかる  
かとさする處よはきのえきつ  
怪ばくあるおの商ひ  
活魚を織こじらり又(ア)も  
人のうつまふゆづれのあ  
うつくしげのうるも波の波  
お佛よすらふ没むきのま

茶玉網を小粒から出よせとて  
模様のゑのねかえきの内  
ひくはきを絞めを嫌うり  
鶴はうりてやをせらるる  
金筆、古風のものとあうり  
山際のあたごとくはおと  
翁たよりすて馬の電(ア)

まつらへまつりのやうち  
あをほせらるるのめ

勢  
華

山を隠すとふら煙りせし  
の外よだすまゆのあくまく  
えれす、てうなれりきの越  
に角のさけべき、とく牛  
のくにのうひをむかへ  
思ひ外の道をなれてあひの  
り内へもみへぬとぞれ

對へまつり甲斐の やうもん  
この事は まことに いふと  
やうふ 伊勢人を いふ事  
何事か へもほ 詞義言葉  
を まつて 一部 きりくに あら  
より おもひ 翁の 葉も百  
字あらまつに まつせむ いづみ

小前の ほそり に すま  
家めりては されや 不可  
説の 事は どうか うな 世事  
は山を まつて まつて まつて  
る 友とも 大あやし  
きわらひと 金集あり 井根  
よふか 敷書記 うづみ

本居宣長著　新編　日本書紀傳

金言

江戸神田佐久間町  
廣井秀哉

信濃國永久縣

登鹿村

川保氏

宮澤藤吉王